

渡部 悦和

『米中戦争』
— そのとき日本は —

(講談社現代新書, 2016年)

220781028 柴田蒼生

本書の目的

- 1 アメリカ、中国という大国に挟まれた日本
- 2 経済的にも文化的にも強いつながりのある両国だが、アメリカ対中国という構図は昔から継続
- 3 危機管理の本質により最悪の事態に準備が必要



第1章 米中戦争を理解するためのキーワード

大陸間戦争の可能性

トゥキュディデスの罠・・・新興の覇権国と既存の覇権国間の対立が戦争を起因

アリソン教授の研究では過去500年間で16ケース中12ケースが戦争

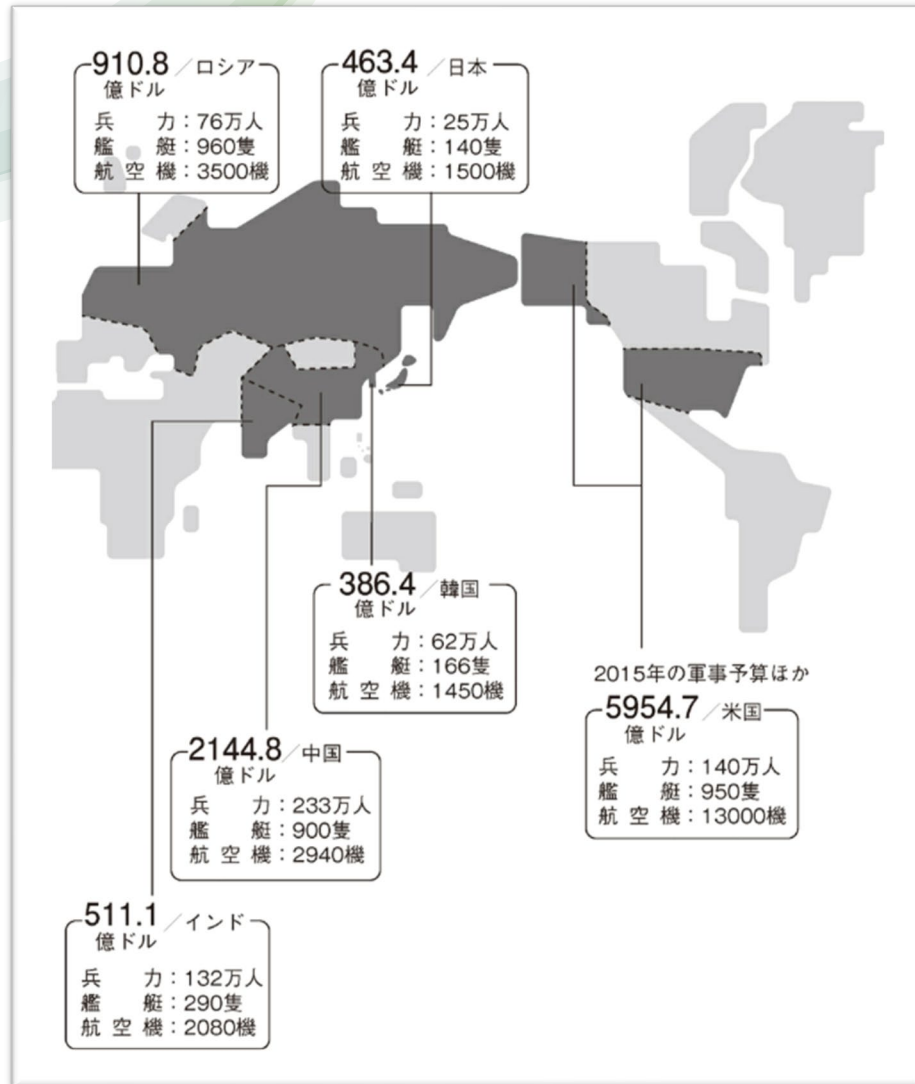


習近平の見解
「適切な判断で回避可能」



米国防衛相
「国家軍事戦略において、大陸間戦争の可能性が増大していると認識」

軍事力の比較



1 米国>中国>ロシア>インド>日本>韓国の順に強大な軍事力

2 実際の戦争では兵器の質や訓練練度など多大な要素が勝敗に影響

第2章 ダイナミックに変貌する人民解放軍

中国人民解放軍…中国共産党の軍隊であり、かつて国民党との革命戦争に勝利

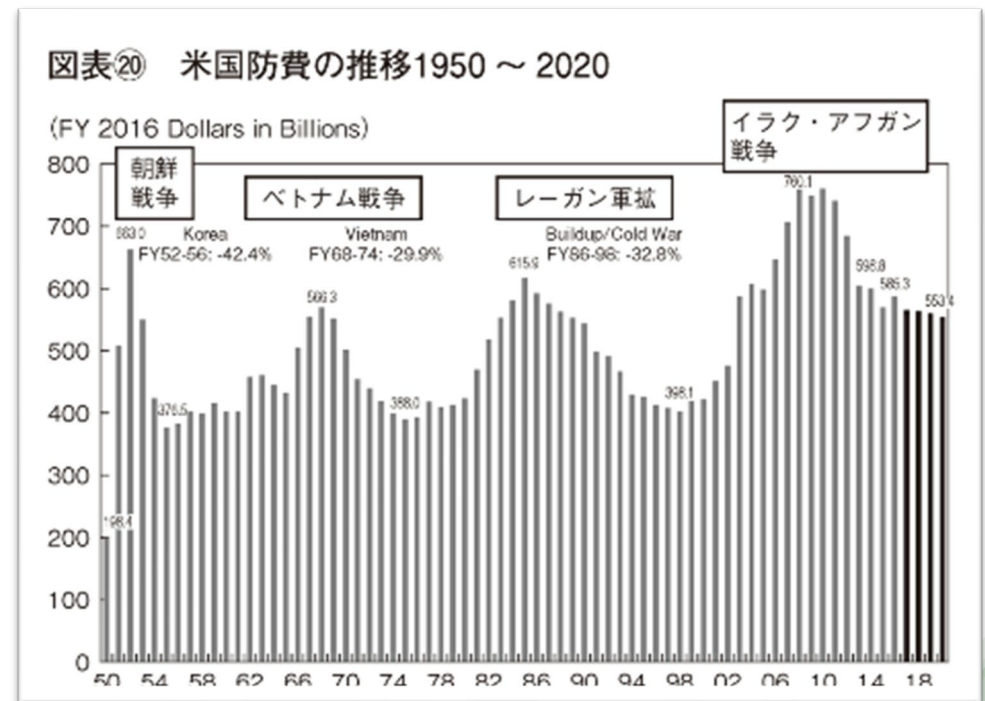
軍の実態は不透明だが、中国の国防費は世界2位であり年々急増

軍内部の腐敗は深刻であったが、習近平主席が「戦って勝てる軍隊」に大規模な改革を実施

第3章 最強アメリカ軍と将来構想

1 米国の強さの要因は1950年から2020年までの長期間にわたる世界1位の国防費

2 軍産複合体という軍、国防産業、シンクタンク、アカデミアが連携し、専門家が経験を得て、安全保障を支持



エア・シー・バトル（ASB）構想…中国との将来の戦争に用意した構想であり、中国の接近阻止/領域拒否に対して敵を混乱破壊打倒のための作戦計画

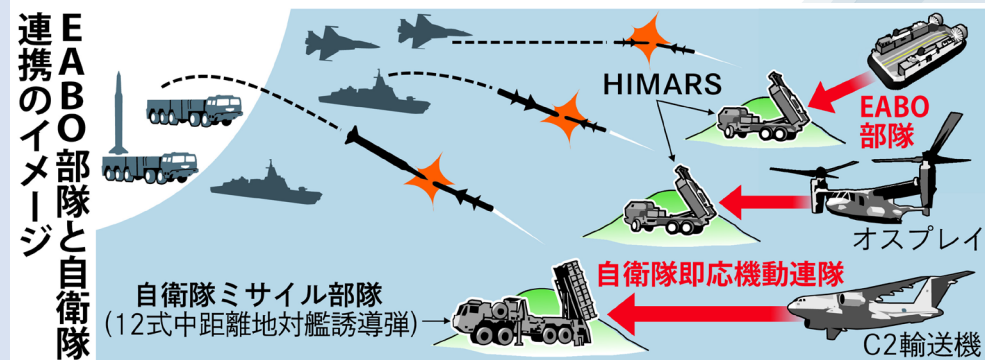
1 一番の目的は「紛争抑止」でありアメリカ側から先制攻撃はしない点や相互核兵器は使用しないなど前提条件を維持

2 この作戦には中国本土への遠距離攻撃兵器や日本やオーストラリアなどの同盟国の支援を前提

第1段作戦:防勢作戦（中国の先制攻撃に耐える）



第2段作戦:反攻作戦（中国主要都市へ攻撃）



第4章 「台湾紛争」「南シナ海紛争」のシナリオ

米中戦争に関連する戦争のシナリオを分析し、中国の戦力投射能力と米軍の対応策を評価

〔南シナ海紛争〕

- 1) 中国が南沙諸島やフィリピンとの紛争に介入
 - a) 米国はティツ島からの中国軍排除を決断
 - b) 米軍は大半の分野で優勢だが、2017年までにはその差が縮小

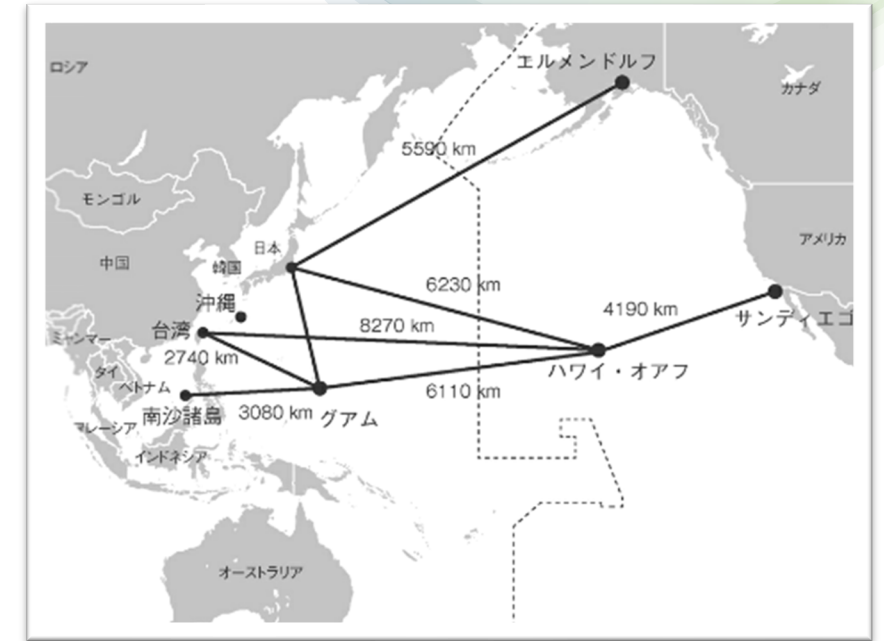
〔台湾紛争〕

- 2) 中国が台湾を軍事占領
 - a) 米国は台湾防衛のために介入
 - b) 在日米軍基地への攻撃の可能性がある、
米軍の航空優勢確保が困難

米中戦争・日中紛争が生じやすい4つの地点



- 1 2017年時点で米軍が全般的に優位を保持
- 2 台湾紛争シナリオでは、両軍の実力が伯仲し、中国が一部で優位となる可能性
- 3 南シナ海紛争シナリオでは、米軍が引き続き優位を保有
- 4 中国軍は局所的な航空優勢と海上優勢を確立したが、総合的には米軍優勢
- 5 戦場までの距離と地形が双方の目標達成に影響



第5章 今日本はなにをすべきか

1 内憂外患の現状

- a) 日本は内憂（地震などの大災害）と外患（安全保障問題）どちらの問題も多数
- b) これらの有事には、強靱な社会体制とインフラ構築が必要

2 外患の具体例

- a) 中国（急速な経済発展と領土要求を背景に高圧的な態度）
- b) ロシア（プーチン政権化で他国への本格的な軍事侵攻を展開）
- c) 北朝鮮（核・弾道ミサイル開発に熱心、日本にとって無視できない存在）

結論

- 1 これまででまとめたように、米中戦争勃発の可能性は十分にあり、もし戦争が起これば日本の参戦は確実
- 2 日本と米国は協力関係だが、中国とは尖閣諸島や竹島との領土問題や経済的な問題にも長年直面中
- 3 日本は中国と米国の仲介役となり中国主導の戦争の抑制が最重要項目、そのため日本人はこの現状を知り、日米同盟の強化や、東アジアなどの国際的な連携を強化すべきと結論付けた

